



御矢師・永澤家の技を受け継ぐ12代目。「矢師になるなら弓を引け」との家訓から、修業を始めた23歳から弓道を始め、現在六段。

## 伊達藩に仕えた御矢師おんやし

自然の竹を材料にした伝統の竹矢作り。今やその職人は全国でも数えるほど。永澤家は、伊達藩お抱えの矢師「御矢師」を代々務めた家柄で、五城目町で永澤明久さん(47)が技を受け継いでいる。

明久さんの祖父・政治郎さん(故人)は、東京で矢師をしていたが、戦火を逃れて1945(昭和20)年に妻の古里、五城目町に一家で疎開。職を転々とした後に秋田県内で良質な矢竹を見つけ、終戦の7年後に矢師を再開した。明久さんの伯父、父も矢師を継ぎ、永澤家は同町に永澤弓具を開いた。「継ぐ予定はなかったけど、高校を卒業して県外に出たり、いろいろな仕事をしたりしているうちに自然と家業に落ち着いた」。そう穏やかに話す明久さん

## 町の竹矢職人

【御矢師 永澤明久】五城目町小池字岡本下台105 TEL.018-852-4743

しちりんの炭火の熱で竹を炙り、軟らかくして「矯木」と呼ぶ道具で挟み、手前から前方へとしごいて伸ばす。窓から入る日の光にかざして仕上がりを確かめながら、竹の曲がりやゆがみを真っ直ぐに整えた。

## 技を受け継ぐ

永澤弓具とは別の場所に工房を構え、祖父、伯父亡き後、11代目として伝統の竹矢作りに専念してきたのは父・繁明さん。明久さんは父の工房で腕を磨いてきた。職人は技を目で盗むもの。並んで作業をしていても言葉少なだったが、成長を静かに見守り続けてくれた父がこの3月に病で亡くなった。「これからは職人として一人。もっと技を磨いていかなければ」と明久さん。気丈に、自らに厳しく話す。東北唯一の御矢師。代々大切にしてきた技を守る。



は23歳から矢師の道へ。祖父の元で修業し、技を教わった。

## 自然の竹を均一な矢に

竹矢作りは材料の調達から始まる。山の竹が程よく乾燥する稲刈りの時期、矢師自ら県内の山に3週間ほど通い、吟味して3年もの身

の締まった矢竹を刈ってくる。皮をむいて長さをそろえ、1年間陰干ししてから使う。

矢は弓道の競技に合わせて4本1組での納品が基本。4本全て長さ、太さ、重さ、重心、弾力が同じでなければならぬ。一方で材料は自然の竹。育った場所や日の当たり具合で太さや長さ、節、曲がり異なる

り、同じものはない。「節が似た4本を選んで均一の矢に仕上げるのが矢師の技。一番難しい」と話す。竹をしごいて真っ直ぐにする「荒矯め」に始まり、完成まではおおよそ85工程。製作に数カ月要する矢もあり、4本1組として1カ月に作る矢は10組に満たない。

今はジュラルミンやカーボン製の矢が普及しているが、「段位や経験問わず、弓道の本質を求めて竹弓・竹矢を使って鍛錬する弓道家は多い」と明久さん。「都度、最高のものを作るのは当たり前。弓道家の高い要望に応えられる職人でありたい」